

(城西人文研究第18巻第2号)

《 翻 訳 》

## プリンツ・フォーゲルフライの歌

—— „Die fröhliche Wissenschaft“ にそえられたニーチェの詩の翻訳の試み——

河 内 信 弘

## はじめに

今手元にあるニーチェの訳詩集だけでも七種類ある。さらにここに一部ではあるけれど、ニーチェの詩を日本語に直してみようと思う。

詩を読み、理解しようという作業は、ゆきつくところ屋上屋を架すると言われようが、そして外国語を日本語に直すことが不可能と言わざるをえないとしても、ひとつには自己の訳を試みる道に通じているように思われる。

この翻訳のめざすところは、ニーチェが „Die fröhliche Wissenschaft“ の七十七番で述べていること、そしてそのエピローグを念頭において、試みることにある。

「南ヨーロッパで人気のあるすべてのものに見られる卑俗性は私にはよく理解できるし、ポンペイを見てまわったり、また要するにどのような古代の本を読んでも出会う卑俗性と同じように、それは不愉快ではない。どうしてだろうか。そこには羞恥心が欠けている故にだろうか。どんな卑俗なものも、イタリアの歌劇やスペインの悪漢小説にお

けるなにか高貴なもの、愛らしいもの、情熱的なものと同じように、自信に満ちて、恥じるどころなく登場する故にであろうか。『動物は人間と同じように権利をもっている。だから自由に走り回ってよいのだ。わが愛する人間よ、君だってやはり動物なのだ、やはりのところ』——これがことのモラルと私には思えるし、南の人間性に思えるのだ。悪しき趣味は良き趣味とおなじように権利がある。それどころか、必要性が大で、確実に満足を与え、言わば普遍語であり無条件に理解される仮面と所作であるならば、悪しき趣味は良き趣味にまさる権利をも持つのである。」(KGW. Bd. V. S. 108~109)

そしてエピローグには次の言葉を見いだすことができる。

「——やめてくれ、やめてくれ、こんな真つ暗な音楽は。わたしたちの回りはぐるりと明るい午前が包んでいるのではないのか。だれが歌ってくれるのだろう、午前の歌を、陽につつまれ、軽ろやかに、羽根をもったように、——そうすればふさぎの虫は追い払われることもなく、招かれて一緒に歌い、いっしょに踊るだろう。」(KGW. Bd. V. S. 319)

ニーチェは „Die fröhliche Wissenschaft“ の新版にこのエピローグを含む第五書を初版にくわえ、「プリンツ・フォーゲルフライの歌」を歌って、添えたのである。

そして『この人を見よ』のなかで振り返って言う。

『『プリンツ・フォーゲルフライの歌』はシシリアでその大部分ができあがったが、文字どおり《*gaya scienza*》というプロバンス的概念を思わせる。歌い手と騎士という自由精神の一つになったものを。とくに最後におかれた『ミストラールによせて』は、許されたし、道徳を遙かに越えた奔放な踊りの歌であり、プロバンス調そのものである。』(KGW. Bd. VI. S. 331~332)

はたして、ニーチェの言っているような姿をほんのわずかでも日本語にできるかどうか分からないが、試みてみよ

うと思う。

以下 Gruyer 版にしたがって、日本語にする。

付録

プリンツ・フォーゲルフライの歌

ゲーテに寄せて

不滅というのは

ただあなたのたとえ

神、このあやしげな代物は

詩人がうまいこと手に入れたもの・・・

世界という車輪、車輪は転がり

つきからつきへと目標をふんづけていく

そんなものよ——恨みがましい男はそう言い

おどけた男はこう言う——戯れさ・・・

世界という戯れ、すべてを支配する戯れは

ほんとうの姿とかりの姿をごちゃまぜにして——  
 永遠というナンセンスは  
 俺たちをまぜこむのさ——そのなかへ・・・

詩人に与えられたこと

このまえ一休みしよう

おい茂った樹のしたで一息いれていると

ティックエンティックエンとかすかに聞こえてくる

拍子とリズムをとっているのか、調子に乗って

気分を害され、顔をしかめてみたが——

とうとう負けて

わたし自身が詩人のように

拍子をとっていっしょに話しだしていた

詩を作っているかのように

ひと言ひと言がひょいひょい跳びはねていたのには

とつぜんおかしく、おかしくなつて

四分の一時間も笑いが止まらなかった

おまえは詩人かね、詩人かね、おまえは

おまえの頭は、そんなに悪いかね

——『ええ、詩人でございますとも、あなたさまは』

きつつきは肩をすぼめてそう言った

この茂みでだれを待ちこがれている

おれさまは追いはぎ、だれを待ち伏せている

簡潔な思想か、それとも比喩か

おれさまの韻はそいつらのおしりにすつとまたがる

口から漏れて、下手くそなダンスを踊っているやつを、即座に

突き刺して詩人というものは、詩に整える

——『ええ、詩人でございますとも、あなたさまは』

きつつきは肩をすぼめてそう言った

韻は、思うに、矢のようなものか

小さな体の急所を突いて

矢が突き刺さったときの

とかげがピクピク震えて、跳ねあがるさまよ

ああ、こうしておまえたちは死ぬ、哀れなものよ

あるいは酔いどれのようによろめいていく

——『ええ、詩人でございますとも、あなたさまは』  
きつつきは肩をすぼめてそう言った

大急ぎのねじれた箴言

酔っ払った言葉、それが次から次へと押し寄せて

ついにはお前達はみんな行から行へ

そのがん首をリズムの鎖にぶらさげる

ひどい野郎じゃないか

それを——喜ぶとは、詩人ってやつは——悪党じゃないか

——『ええ、詩人でございますとも、あなたさまは』

きつつきは肩をすぼめてそう言った

馬鹿にするのか、鳥さんよ、からかうつもりかね

頭がすでにいかれちまっているならば

こころはもつといかれちまっているのかね

恐れよ、恐れよ、俺さまの憤怒を

しかし、詩人は——憤怒のなかでさえ

あしかれよかれ、韻をふむ

——『ええ、詩人でございますとも、あなたさまは』  
きつつきは肩をすぼめてそう言った

南の国で

こうして曲がった枝のうえで

私の疲労を揺する

一羽の鳥がここに招いてくれて

休んでいるのは鳥の巢のなか

さて私はどこにいる、ああ、遠い、ここは遠い

海は白く眠りこみ

真っ赤な帆が浮かぶ

港、塔、いちじく、岩山

あたりにのどかな歌、羊の鳴き声——

南の無垢よ、受け入れてくれ

一步一步——これは人生じゃない

ひと脚まだひと脚、こいつもドイツ的、重くてかなわない

まきあげてくれと風に頼んで  
鳥と一緒に舞うことをおぼえて——  
海を越えて南へ飛んできた

理性か、うんざりする

これならあつと言う間にゴールインさ、しかし速すぎるといふもの  
飛んでいるうちに、何にたぶらかされていたか、分かったよ——

もう勇氣と血と精氣とを私は感じている

あたらしい生へ、あたらしい活動へと・・・

孤独に考えることを賢明と言おう

だが孤独に歌うのは——そりゃあ愚かというもの

さあおまえたちへの私の褒め歌を聞いてくれ

静かに私をぐるりと取り囲み

性悪の鳥どもよ、ぐるりとな

こんなに若く、こんなに不実で、こんなにたくらみ深く

つくられているのか、恋のために、おまえたちは

どんな時間もみごとにおっぱらうために



北では——私は気がひけるが白状すると——  
愛していたのだ、一人の女を、ぞっとするほどの婆さんを  
“真理”、それがその名前だった……

信心もののベツパ

わたしのからだがきれいなうちは  
しんじんのかいもあるものよ  
みなさんごぞんじでしょ、かみさまがおんなずきってこと  
それもかわいいこがね  
あのびんぼうなぼうさまが、たくさんのぼうさまとおんなじに  
わたしのそばにこんなにいたがったとしても  
おゆるしくださるにちがいない  
きつとよろこんで、かみさまは

ごめんだわ、しらがまじりのきょうふさま  
そう、まだわかなくて、ときどきかおをあからめて  
ふつかよいでふらふらしても  
しっとにくるってなやみつきないおぼうさま

おとしよりはかんべんさ

かみさまはとしよりはすぎじゃなし

とてもみごとにかしこくも

ごはいりよくださっているもの、かみさまは

きょうかいはいきるみちをおとぎになって

こころとかおをためされる

いつもわたしをおゆるしくださるの――

そうよ、わたしをゆるさないひとなんていやしない

かわいいくちでそっとぎんげして

ひざまずいて、そとにでる

それからあたらしいつみをちょっとおかして

まえのつみはちようけしよ

このよのかみさまにたたえあれ

きれいなおとめをあいされて

こんなこころのなやみを

よろこんでゆるされる

わたしのからだがかきれいなうちは

しんじんのかいもあるものよ  
よぼよぼのばあさまになったなら  
あくまがわたしをよめにといつてくるだろし

### 神秘の小船

きのうの夜、すべてが寝静まり  
せまい街路をふきぬける風も  
ようやく気まぐれの溜め息をもらすこともなくなったのに  
わが枕は安らぎをもたらさなかった  
阿片も、いつもの深い眠りを誘わず  
——やましいところない良心——さえも

とうとう眠ることをあきらめ  
わたくしは浜辺へいそいでいた  
月は明るく、おだやかに——  
暖かい砂浜で、男と小船に出会った  
眠たげに二つの影、羊飼いと羊——  
眠たげにその小船は陸を離れていった

一時間、ひよっとすると二時間も

あるいは一年たったか——そのとき突然に  
わたくしの意識と思想が沈んでいった

永遠の単調のなかに

そしてかぎりない深淵が

口をあけた——と、それは消えていった

朝がきた、黒い深みに

いっそうの小船が浮かび、動かない・・・

なにかあったか、ひとつの声が上がった

やがて無数の声が上がった、なにかあったか、血か——

なにもなかった、われわれは眠っていた、眠っていたのだ

みなか——ああ、深々と、深々と

### 愛の告白

(そのとき、詩人は穴に落っこちたが——)

ああ、奇跡だ、あほうどりはまだ飛んでいるのか

舞い上っていく、それで羽根は動いていないのか

なにが舞い上げ、なにが運こんでいくのか

あほうどりはなにが目標で、なにを求め、なにが手綱なのであろうか

星と永遠のように

あほうどりはいま高さに生きている、生を避けている

嫉妬にすら同情している――

あほうどりさえも空に浮かぶ、それを見るものも高くを飛んでいるのだ

ああ、あほうどり

高さへ、永遠の欲求にあやつられ、わたしは駆りたてられる

おまえを思った、――だから飛んだ

涙に、涙にくれながら――そう、わたしはおまえを愛している

### テオクリトスにならった山羊番の歌

さてもはらがいてえからと、よこになっている――

とこじらみのやつらがおらのちをすいやがる

むごうはまだまだあかりをともしてさわいでやがる

きこえてくるだよ、みなおどってるさね・・・

あのこはいまごろ

しのんでゆくわといったよ

おら、いぬのようにじっとまってるによ——

そのけはいもねえ

やくそくするとき、あのこはじゆうじをきったよ、  
なんしてうそつくことができたろうか

——それともだれでもかまわずあとおんまわすだか  
おらのめすやぎみていによ

あのこのきぬのスカートはだれからだろか

ああ、おらのじまんのあのこは

おすやぎがまだまだいっぱいすんでいるよな

このもりのあたりにはよ

——ほれちまって、まつとは

どうしたらええだか、からだにどくだ

むしあつくてたまらねえよるに、おかげでさ  
どくきのこがにわにはえてきたよ

ほれるとはななつのやくびょうがみとおんなじで  
おらをくいつくして――

おらもうなんにもどをとおらねえ  
あばよ、げんきで、たまねぎどもめが

つきはうみにもうしずんじまった  
ほしはみんなつかれちまった  
だからひるがあおいかおしてよ、やってきた――  
おら、しにてえよ

『この腰のすわらぬ魂らに』

腰のすわらぬこれらの魂に

ふんぬの恨みをいだく

懊悩がその栄誉のきわみ

自己への不快と羞恥がその称賛のきわみ

これらの魂がたよる綱にたよらずに  
時をつきぬけて行くと

これらの魂の私におくる視線には  
毒々しく甘えた希望のない嫉妬がうかぶ

これらの魂は断固として私をののしり  
せせら笑うがいいのに  
あてもなく探すあのような眼差しでは  
永遠に私に迷いつづけることになるう

### 絶望の道化

ああ、おれが机や壁に書いたものは  
そりゃあ心も、手つきもふざけてはいたけれど  
おれの机や壁を飾るはずであったのだ・・・

『ふざけた奴らが汚しやがった——  
机や壁を洗わにゃならない、最後のしみがなくなるまで』



おまえたちはそう言う

許しをこうよ、おれも一緒に洗うから――

おれは覚えてしまった、スポンジとブラシの使い方を

批評家として、検査官として

だが、この仕事が終わったら

見せてもらうか、りこうすぎるおまえたちが

りこうにも机と壁を糞でぬ・・・・・・・・を

Rimus remedium

(治療としてのリズム)

あるいは、詩人はいかにして自己をなぐさめるか

おまえの口もとに

よだれをたらす魔女よ、時よ

時がだりだりたらりとたれさがる

『呪え、呪え

永遠の喉ぶえを』

むだか、おれが吐き気をもよおし叫んでみても

世界は——真鍮

灼熱の雄牛、——牛に聞く耳はない

震えるナイフで苦痛が

生身のおれに書きつける

『世界にこころなんかあるもんか、だからといって

世界を恨むなら、それは愚かというものさ』と

そそげ、阿片のありったけ

そそげ、熱病、毒をおれの脳髄に

おれの手と額をずいぶんしらべたるうが

なにが聞きたい、ん、なにが、『いくらかしら——お金は』

——やっばりな、呪われやがれ、この淫売め

物笑いにしやがって

だめだ、もどって来てくれ

そとは寒いし、雨の音が——

もつと穏やかに、話をつけるべきかな

——とつてくれ、ここに金がある、どうだね、硬貨のかがやきは——  
 おまえを「幸福」とよぼう  
 熱病のおまえを祝福しよう——

扉がばたんと空く

雨がおれのベットまで吹き込む

風に明かりは吹き消されて、——さんさんだ

——こんなときリズムがあふれてこない奴は

賭けても結構、結構

くたばっちゃうよ。

『わたしのしあわせ』

サン・マルコの鳩にふたたび会う

広場は静まり、午前はこの上にやすらう

静かな冷気のなかですることもなく歌をうたえば

鳩のむれのように歌は青空に舞いあがり——

けれどももうひとつの韻を歌の翼にかけようと

戻ってこいと呼び寄せる

——わが幸せよ、わが幸せよ

絹の、あわい青の、静まれる天の覆い

おまえにつつまれて、色鮮やかな寺院はまもられている

この寺院をわたしは——何を言うのだ——愛し、畏れ、嫉妬している……  
その魂をできることならまこと飲み干してしまいたい

いつかその魂をもとに返さなければならぬのか——

いいや、なにも答えてくれるな、目に奇跡の喜びをあたえるおまえよ

——わが幸せよ、わが幸せよ

峻厳の塔のおまえよ、獅子ライオンのように

なんの苦もなく、おまえはここによじ登り、勝利をおさめたことか

おまえは鐘の深い響きによってこの広場を支配する——

フランス語なら *accent aigu* (鋭符号) とでもいうのだろうか

わたしがおまえのように留まるならば

知るだろう、絹のように柔らかく強いて……

——わが幸せよ、わが幸せよ

消えよ、消えよ、音楽よ、影が濃くなるにまかせよ

ついに影がとび色でなま温かい夜にそだつまで

音楽には明るくて早すぎる、まだまだ

金の飾りはゆうべの薔薇の輝きのなかでゆらめいてはいない

まだまだ昼がたっぷりとこのこっている

詩をつくり、忍び歩き、孤独の秘め事にはまだはやすぎる

——わが幸せよ、わが幸せよ

### 新しい海にむかって

向こうへ——行こう、これからは

自分を信じ、自分の舵を信ずる

ぽっかりと海はひろがり、虚空に

わたしのジェノワの船は乗り出す

ことごとく新しく、さらに新しく輝き

真昼は時空のうえに眠り——

無限よ——おまえの目だけがおおきく

わたしを見つめている

## シルス・マリーア

待ちながら、待ちながら、——しかしなにを待つでもなく  
 善悪の彼岸で、あるときは光を、あるときは影を楽しみ  
 戯れそのものとなり、湖となり、真昼となり  
 目的から解かれた時間となり、ここにわたしは座っていた

すると、とつぜんに、君よ、一は二となった——

——そしてツァラトゥストラが私のかたわらを通りぬけていったのだ……

## ミストラールのよせて

## 踊りの歌

ミストラールの風、雲の狩人

哀しみの殺害者、天のほうき

吹き荒れる者、おまえを、わたしは愛してやまない

われわれはおなじ母からうまれた二人

贈られた初めての子、ある運命を永遠に

定められたもの、そうではないか

滑らかなこの岩の道を

舞ながら走っておまえを迎える

笛を吹き、歌うおまえにあわせて、舞ながら

そんなおまえは船も持たず、舵もつけず

奔放のもっとも奔放な兄弟として

放埒無頼の海を飛び越える

目が覚めると、おまえの声が聞こえ

この岩の断崖へ

海辺の黄色のこの岩へと飛んできた

ああ、もうそこにはおまえは来ていた

きらめくダイヤモンドの奔流の速さで

意気揚々と山から駆けくんだり

平らな天のたたきを

わたしには見える、おまえの駿馬が走る

車におまえは乗り

鞭をふるうその手が

電光のように馬上に

ひらめく――

もつと速く舞いおりようと

見える、おまえが車から跳びおりる

身を引き締めて矢のように

まっすぐ深淵につきすすむ――

ようやくの夜明けをつげる

ばら色をつらぬくひとすじの金色の光のように

さあ、踊るがいい、無数の背で

波の背で、悪意の背で――

幸いあれ、新しい舞をつくりだすものに

自在に踊ろう

自由な――と、われらが芸術を名づけ

華やいだ――と、われらが知識を名づけよう

それぞれの花から花を



一輪取ってわれらの榮譽をかざり

葉を二枚取って冠をつくろう

いにしえのプロバンスの吟遊詩人のように

聖者と娼婦のあいだで

神とこの俗の世のあいだで踊ろうじゃないか

風に乗って踊れない、そんな者

包帯をまかなきゃならない、そんな者

縛られて、不具の老いぼれ

信心めかした阿呆に似る、そんな者

名譽に狂ったうすのろや、徳にがあがああひるども

われらが樂園パラダイスから出てうせろ

道の埃をまきあげて

ことごとく病人どもの鼻に吹きこんで

病人というやからを追っ払おう

瘦せこけたその胸の吐息から

気力のうせたその目から

この浜辺を隅から隅まで解き放つのだ

天を濁らすものたちを狩りたてよう  
世界を黒くするものたちを、雲で覆う詐欺師どもを  
天上の国を明るくしようじゃないか  
荒れ狂おう・・・ああ、あらゆる自由な精神のなかの  
自由な精神、おまえとともに二人となって  
わたしの幸福は嵐のごとく荒れ狂う——

——そしてこのような幸福の記憶が  
永遠であるように、その遺産をおまえは受けとるがいい  
この花の冠をいまいっしょに手に取るがいい  
いままでよりも高く、遠く、遙かに放りあげ  
天にかかるこのはしごを駆け上がり  
冠を——星に——懸けてこい

### あとがき

日本語に翻訳する際に、いくつかの試みをしたので、ここにその試みを記し、ご批判を仰ぎたいと思う。

ここに訳出した全ての詩を通して、詩行の終りから句読点を取り除いてみたことがそのひとつである。疑問符や感嘆符は日本語には本来存在しないから、それは使うことをさけたが、その延長上として句読点をも除いてみたのである。

この詩集中、二編、一人称ではあるけれど、明らかに作者とは別人の口を借りた一人称の語り口の詩がある。『信心もののベッパ』、『テオクリトスにならった山羊番の歌』である。イタリア、南ドイツでは Beppa (男の場合は Beppo) は教養のない召し使いなどを象徴する名前であり (Beppa→Josepha→Josephine, Beppo→Joseph) それに合うような試みとして、女の口調のはっきり分かる平仮名で訳してみた。そこで、Beppa のようにその名が教養のなさを示してはいないのだけれど、『山羊番の歌』を Beppa の対として男の口調の平仮名で訳してみた。さらに『山羊番の歌』は一種の脚韻の遊びを試みている。三行同じ音で、最後の一行別の音としてみた。例えば

よこになっている

おらのちをいやがる

さわいでやがる

おどってるさね

いまごろ

いったよ

まってるによ

けはいもねえ

のように。かつて九鬼周造が「押韻論」で日本の詩歌の押韻の可能性を論じていることも確かめ、またそのころ中村慎一郎たちが押韻の可能性を実作によって探っていたこともあったが、実りをもたらさなかった事実も確認した。ところでニーチェの詩は韻がしっかりとふまれている。ここで訳した詩のなかでもはつきり韻について「詩人に与えられたこと」で歌っている。せめての試みとして、この詩でしか押韻の試みはできなかったけれど、おこなってみた。ここでことさらに書き記すほどのことではないかもしれないが。

「絶望の道化」においては、脚韻が意味をとるうえで重要な働きをしているので、原文の後三節を引用する。

Doch ihr sagt: „Narrenhände schmieren,——

Und Tisch und Wand soll man purgieren,

Bis auch die letzte Spur verschwand!“

Erlaubt! Ich lege Hand mit an——,

Ich lernte Schwann und Besen führen,

Als Kritiker, als Wassermann.

Doch, wenn die Arbeit abgethan,

säh' gern ich euch, ihr Ueberweisen,

Mit Weisheit Tisch und Wand besch. . .

まず三節の終わり *Wassermann* は梅毒の診断に用いられる血清反応にその名が冠んさられた *August von Wassermann* に由来する「検査官」ととった方がよいとおもわれる。ニーチェの発狂が梅毒によるものであったか、それとも遺伝的なものによるものであったか、定かにすることはもうできないであろうし、できたとしてそれは根本的にニーチェが変わる訳でもないが、興味深い一語がふくまれていると言う事はできるであろう。邦訳はいままで「水を運ぶ人」の意味でとられている。

さういふの一語 *besch...* は *bescheiden* 大小便で汚すととった。つまり

*schmier*

*purgieren*

の韻の踏み方に従い

*Ueberweisen*

*bescheiden*

と韻を踏んでいると考えられるからである。そこで思い切って、「机と壁を糞尿でぬりたくったことを」を伏せて、訳してみた。これは千葉大学外国人教官シユテファン・ヴント氏の助言によるものである。

「シルス・マリア」も原文をあげる。

Hier sass ich, wartend, wartend,—doch auf Nichts,  
 Jenseits von Gut und Böse, bald des Lichts  
 Geniessend, bald des Schattens, ganz nur Spiel,  
 Ganz See, ganz Mittag, ganz Zeit ohne Ziel.

ちよび' ganz nur Spiel 以下は、従来いわば独立して訳されて来ている。つまり

.....なべてただ戯れ、

なべて海、なべて真昼、なべて目当なき時。(浅井眞男訳)

.....ただすべて遊びにしかず、

すべて湖、すべて真午、すべてあてどない時間。(朝日英夫訳)

.....すべてがたわむれであった。

すべて湖、すべて正午、目標をもたない時であった。(氷上英廣訳)

しかしながら拙訳においては

Hier sass ich, ganz nur Spiel, ganz See, ganz Mittag, ganz Zeit ohne Ziel.

と考えて、つまり Sie stand da, ganz Entschlossenheit. と同じ用法と理解して、主語の「わたし」にはっきりかかるように、訳してみた。

……………戯れそのものとなり、湖となり、真昼となり

目的から解かれた時間となり、ここにわたしは座っていた

内容的に見ても、世界の「私」との1になったことがはっきりして、そこからツァラトゥストラが分身として、「私」の溶け込んだ世界から生まれた事が明らかになるであろう。それは私の解釈ということになるだろう。

最後になったが、私のさまざまな質問に快よく応じていただいたシュテファン・ヴント氏に心からお礼申し上げたい。

《使用テキスト》

Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe. hrsg. von G. Colli und M. Montinari. Walter de Gruyter, Berlin, Bd. V<sub>s</sub>, 1969 (KGW. Bd V<sub>2</sub>), Bd. VI<sub>s</sub>, 1969. (KGW. Bd. VI<sub>s</sub>)

《参考文献》

P. Grundlehner : The poetry of Friedrich Nietzsche, Oxford University, New York, 1986.

『ニーチェ全集』秋山英夫・富岡近雄訳 人文書院 京都 昭和四七年

『ニーチェ全集第1期第十卷』氷上英廣訳 白水社 東京 一九八〇

『ニーチェ案内 詩と箴言から』多田利男編訳 勁草書房 東京 一九七二

- 『ニーチエ詩集』 浅井眞男訳 三笠書房 東京 昭和二五年  
『識られざる神に ニーチエ詩集』 山元一郎譯 弘文堂書房 昭和一六年  
『九鬼周造全集第五卷』 (月報を含む) 岩波書店 一九八一年